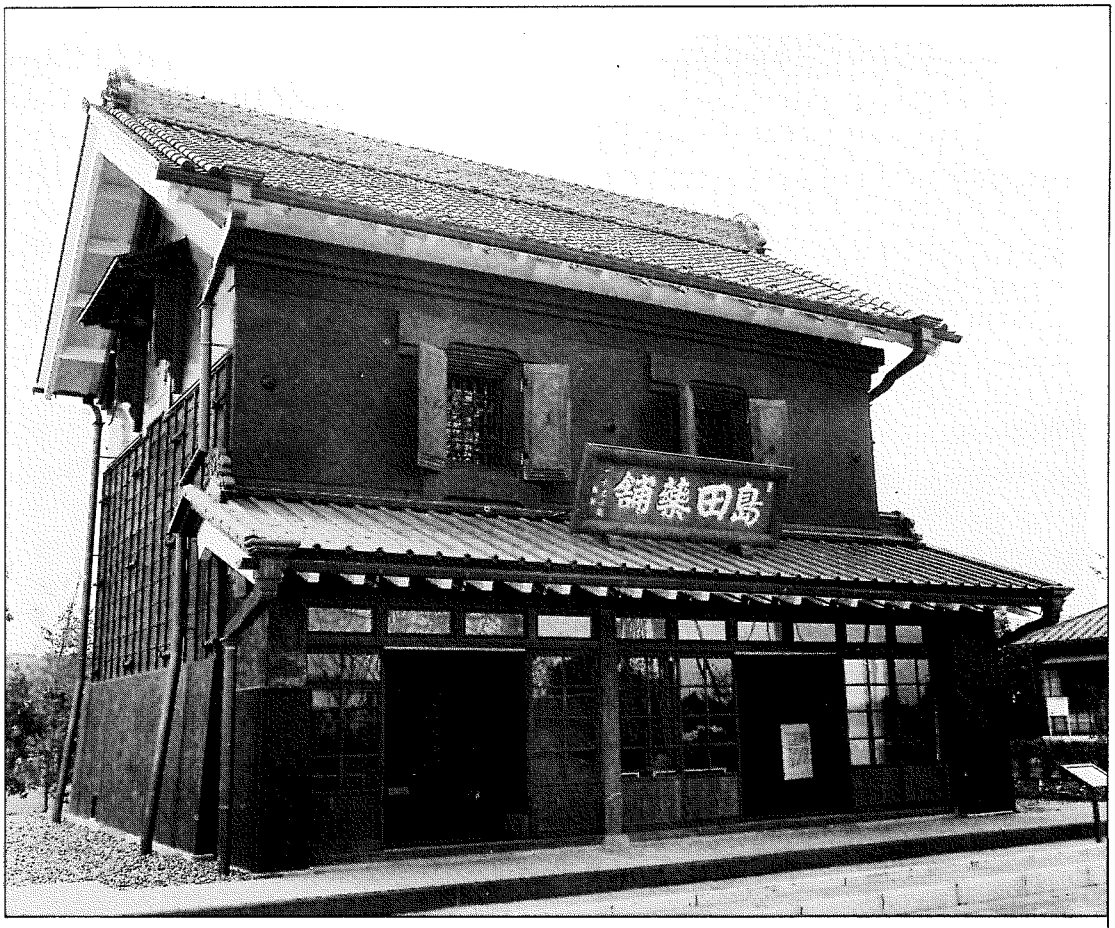
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家　公園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.2　al museo



旧島田家住宅

あるむぜお　al museo　はイタリア語です。
"博物館で" "博物館にて" という言葉です。
あなたは博物館で
　学ぶ？　遊ぶ？　語らう？　楽しむ？　考える？
　憩う？
博物館で、あなたの体験、発見、出会い、いい時を
それぞれみつけられますように。
郷土の森があなたの素敵な博物館でありますように。

旧所在地	府中市宮町２－１
解　　体	昭和57年８月～11月
復　　原	昭和60年３月～62年８月
構　　造	木造２階建（３階部分は屋根裏） 土蔵造り
延床面積	187.29㎡
設計・監理	早稲田大学建築史研究室 （代表）渡辺保忠
施　　工	㈱大門組

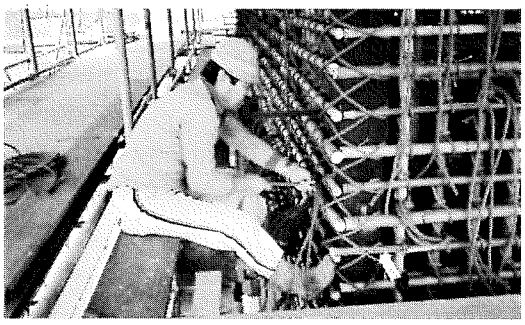
旧　島　田　家　住　宅

甲州街道の宿場町府中。そのなかで大国魂神社をはさんで東側の新宿と呼ばれるところが、この土蔵造りの店蔵が建てられた場所です。

島田家は古くからこの新宿に屋敷を構え、金物業と薬種業を兼業（昭和３年からは薬屋の専業）、明治19年（1886）から約２年の歳月をかけこの店蔵を完成させました。１階が店舗、２階３階を物置にするゆったりとした構造をとり、およそ100年の間、甲州街道を行き交う人々の頭上に「島田薬舗」の大きな看板を掲げ続けてきました。

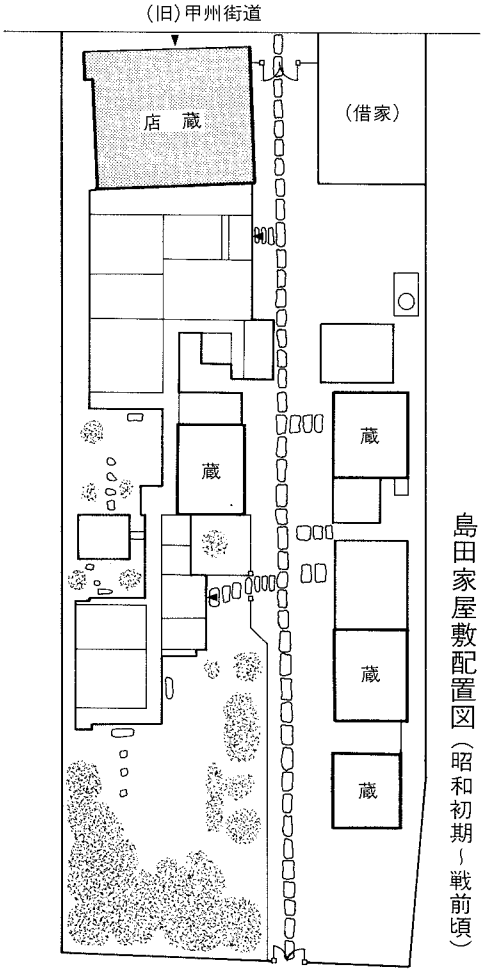
店蔵は建設の費用や日数にかなりを要しましたが、木造と比べると何よりも火事に強いことが魅力でした。このためたび重なる火災に悩まされてきた江戸では、享保の頃、町屋を土蔵造りや瓦葺きにすることが町奉行から奨励され、次第に周辺の町に波及していったといいます。街道沿いに立ち並ぶ店蔵の姿は、その家その町の豊かさを示すものでもあったのです。

戦前の頃までは、こうした昔ながらの景観を残していた甲州街道も、その後の急速な開発の波ですっかり姿を変えてしまいました。そして今日まで残る数少い店蔵のひとつとなったこの旧島田家住宅を永く後世に伝えるため、府中市では郷土の森へ移築することになりました。移築・復原にあたっては、木舞、荒打ちから壁塗りを何度も繰り返していく伝統的な工法に忠実に従いながら、30か月に及ぶ地道な作業を経て、建築当初の姿が再現されました。



木舞掻き　真竹、棕梱縄で壁の下地を組み、そこに土を荒打ちする。

郷土の森では、前回紹介した旧府中町役場と肩を並べて屹立しています。旧宿場町の流通経済を下から支え続けてきたのはハケ下の広大な水田であり、ハケ上に分布する畑地であったことを考えると、伝統的で重厚な蔵造りと奇抜な洋風庁舎建築という対比のみならず、一方が経済機構を、一方が地方行政機構を象徴する建造物として、府中、ひいては日本の近代史がたどってきたさまざまな問題を私たちに語り続けてくれるように思います。（O）



島田家屋敷配置図（昭和初期～戦前頃）

博物館入門講座 その2

博物館の活動 ～学芸員の仕事～(1)

普通、皆さんは、何を目的に博物館を訪れますか？当たり前のことですが、その展示を見に来る人たちが圧倒的に多いと思います。しかし、その展示一つを例にとっても、それが形になるまでには様々なプロセスが必要なのです。今回はこうした博物館の活動について紹介してみようと思います。

活動の柱と学芸員

博物館の活動はおおむね、(1)調査研究活動、(2)資料収集活動、(3)資料整理・保管活動、(4)教育普及活動に分けられます。この4つが、どれひとつ欠けることなく、円滑に展開することが望ましいのです。

学校には教諭、図書館には司書という職員がいるのと同じように博物館では学芸員がその活動を担っています。

調査研究活動

博物館における調査研究は、資料収集、整理・保管、教育普及活動の基礎をなすものと言えます。

博物館は館によってそれぞれ目的があります。例えば、郷土の森では府中あるいは武蔵の自然と歴史と文化を対象に、地域文化の発展を目指して活動を進めています。ですから、博物館は、それぞれの目的にあわせて独自に調査研究をし、その成果を踏まえて収集、整理・保管、教育普及を行っていかなければならないのです。

どのような資料を収集し、どのように整理・保管をし、どのような形で展示や体験学習などの教育普及活動を行うのか。このすべてが調査研究という過程を経ないことには不可能と言えます。

資料収集

資料は、博物館にとって最も基本的な財産です。資料の活用がそのまま博物館の活動に結びつくと言っても過言ではないでしょう。ですから、多種多様な資料を持っている博物館は、それだけ活動の幅が広がると言えます。

ところで、皆さんのなかには、本物、すなわち実物だけが博物館の資料と考えている人はいませんか。しかし、博物館の場合は、実物の資料だけではなく複製品や模型も貴重な資料なのです。さらに、映画フィルムやレコード、展示パネルも資料のうちです。

さて、こうした各種の資料は様々なかたちで収集されます。所蔵者の好意によって寄贈、寄託される場合、購入あるいは作成する場合、更に、採集、発掘される場合もあります。

「もの」を集めるということは、熱中のしかたこそ違いはあっても、多くの人たちが行っていることでしょう。しかし、博物館にとって大切なことは、その目的にそって、理論的に系統立てて、しかも総合的に収集することが必要なのです。

資料整理・保管

博物館の目的にそって収集された資料は、整理保管されなければなりません。資料が博物館に持ち込まれると、修理・復元作業や殺虫・殺菌がされ、分類、登録が終了すると、ようやく収蔵・展示されるわけです。

博物館、特に郷土の森のような総合博物館の資料は、多種多様な材質や形状のものがあります。材質によって保管すべき環境は違いますし、取り扱い方も大きく変わってきますので、整理保管は、熟練だけではなく、最先端の科学的技術や知識も必要とされます。

資料の整理保管は、その活用を目的としていますから、その良否が博物館活動の優劣を決定する大切な仕事といえるのです。

次回は、今回触れられなかった教育普及の話をします。(F)

国司と国府 ——墨書土器"大目館"によせて——

馬場 治子

府中市民にとってはなじみの深い「武蔵府中郷土かるた」の㋑は〝いちばんはじめに武蔵の国府〟です。この様に、府中といえば国府と答が返ってくる程に、現代の町と古代の国府とは結びつけて考えられ、市民の関心も非常に高いものがあります。しかし、1000年から前の武蔵国府の実像や如何に、ということになると想い描ける人はそういないのではないでしょうか。

最近、学際的ともいえる広範な領域で都市論が盛んになっています。都市という概念をどうとらえるか種々議論はあるでしょうが、国府が日本の古代に、同一の目的を持って全国的に造営された地方都市であることは合意されるところと思われます。

まだ考古学的な研究事例が少なかった頃の国府に対する理解は、平城京あるいは平安京をモデルとし、方何町というようなかなり規格化された〝遠の朝廷〟を想定することが多かったようです。しかし、最近の伯耆、下野、近江、肥前などの国府の発掘調査及び研究成果では、国府の中核となる国庁、つまり国司等が執務する政庁については、建物配置などに共通性が認められるものの、その外側の役所群や市街地にあたる地域（国府）については、整然とした碁盤目状の街路などは報告されていませんし、規格性もうかがえないようです。実際には、まだまだ面としての国府域の発掘調査が行われていないこともありますが……。この国庁、国府という言葉の使い分けも厳密に言えばまだ確定されたものではありませんが、概略をつかむためにこうしておきましょう。

武蔵国府の場合は、国庁域については大国魂神社境内(A)から東へかけてが最有力候補地となっていますが、その建物プランについては最終的に確認されていません。また国府域については、1975年に遺跡調査会が組織されて以来、その推定範囲に網かけをして、その中で地下を大きく壊すような建替えをする際は必ず発掘調査を実施してきた結果、300カ所近いデータが蓄積されてきています。その分析はまだ充分になされているとはいえませんが、住居址の密集度や分布状態などからも国府域の実体を探る試みが続けられています。

ここに一つ墨書土器があります。出土地は現在の寿町2－1、国道20号線をはさんで第一小学校の向い側(B)、須恵器の坏に〝大目館〟と記されています。この器形を南武蔵の須恵器の指標となっている南多摩窯址群の編年にあてはめてみると、G－25(御殿山25号窯式)、9世紀末～10世紀前半の頃に製作されたものと考えられます。

大目とは国司の官職名の一つです。律令制は上下貴族の官僚機構によって実質的に政治が動かされていました。それはいわゆる二官八省を土台とする中央官制と、大宰府や各国などの地方官制からなっています。各々の官司の職員構成、職種及び仕事の内容、定員等は職員令に規定があり、その構成の原則は四等官制でした。

それに当てる文字と定員は官司ごとに異りますが、いずれの官司でも長官（統轄者）、次官（長官補佐）、判官（一般事務）、主典（書記）の四ランクで構成されるものです。

国司の場合には、守、介、掾、目の文字で、定員は武蔵の様な大国の場合は各1、1、2（大掾、少掾）、2(大目、少目)と定められています。特に国守だけを指して国司という場合もありますが、正確にはこの四等官全体を表わし、彼らが中央政府の出先機関である国府へ、都から派遣されてきた役人というわけです。

また、官人（貴族）の序列を表わす位階と官職の間には〝官位相当〟という関係があり、何位の人はこういう職に就ける、と決められていました。それから見ますと、大国の守は従五位上、介は正六位下、大掾正七位下、少掾従七位上、大目従八位上、少目従八位下となっています。五位以上が内裏への昇殿を許される殿上人

ですから、国司に任命される人々は位階からみると中の下～下級の官人達ということになります。もっともこの種のものはインフレ傾向になるのが常ですから、時代を経ると相当表よりも高位の者がその職に就く例が多くなります。

とはいえ、国司の職務の内容は一国の一般行政、軍事、警察、司法、宗教と全てにわたり、地方政治の権限が集中していることを考えるとその職の余得も多く、中下級官人にとっては魅力のある役職だったといえるでしょう。それ故に次第に中央政府の出先機関でありながら、その目は"私"へと向い、律令体制の要でありながら体制そのものを根底から覆す要因となっていきました。

先の土器は、この国司の一員である大目の館の存在をうかがわせます。この遺物自体は竪穴住居址から出土していますが、同じ調査地区、或は50m東の調査地区(C)、北側国道20号線をはさんでやはり80mの調査地区(D)でも掘立柱建物址が確認されています。これだけでここに大目の居住地があったと断定することはできませんが、その可能性はあるといえるでしょう。

国庁はいわば役所の本庁舎ですので、その他に付随する建物や、国司の下で働いている人々の住居、また庶民の住居などと共に国司の生活の場も国府域にはあったろうと考えられます。

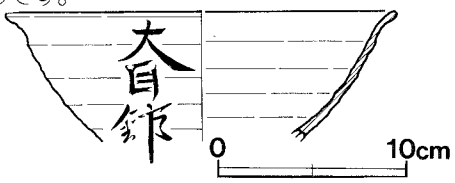
万葉集には、越中の国守になって赴任した大伴家持が配下の国司等と共に、その館で催した宴の折に詠んだ歌がかなり収録されています。またその他にも介、掾、大目、少目らの館で詠まれたものもあり、そこから推測する限り、彼らの"館"は文化的交流の場、社交の場としての役割をこなせ、それに似合うだけの施設もそなえていたと思われます。

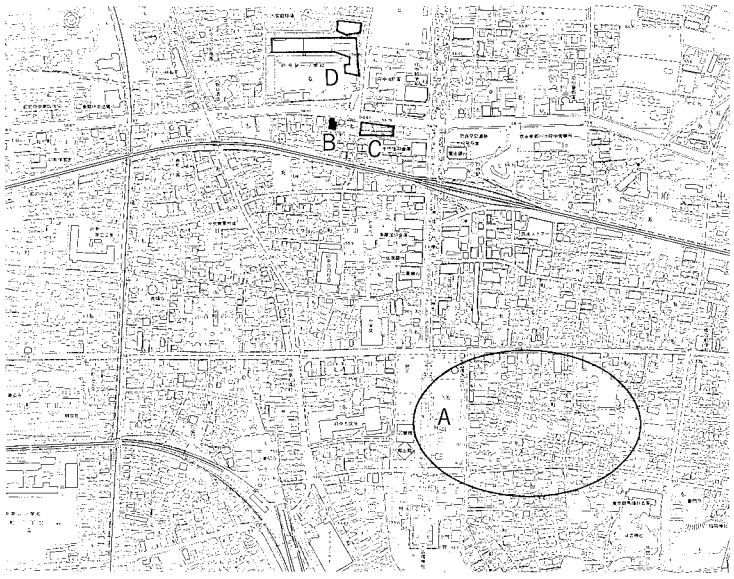
この様な国司の館は官舎だったのか私宅だったのか、その維持の財源はどうしたのか、これらの点について、歴史民俗博物館研究報告第10集（昭和61年）に鬼頭清明氏の考察「国司の館について」があります。

氏の見解に沿えば、8～9世紀、少くとも国府付近に置かれた国司等の館は公の施設の一部として官舎帳にも載せられ、その維持経営には出挙稲（稲の強制貸付で税の一種といえる）の利をあてる、というように公の国衙財政に寄生する形で国司自身の経済活動、富の蓄積の基盤にもなったといえましょう。

その富の蓄積による国司制の変遷は、律令制のごく早い時期から問題になってはいますが、それも含めて9～10世紀には社会全体が大きな変化を遂げていきました。各地の国庁域の発掘調査から、この時期に国庁遺構に大きな転換がおきているという見解もあります。

ちょうどこの時期の器形と"大目館"の文字を持つ坏ですが、これ一点で全てを語らせるわけにはいきません。武蔵国府の実像に迫るために今後も考古学資料に大いに注意していきたいものです。



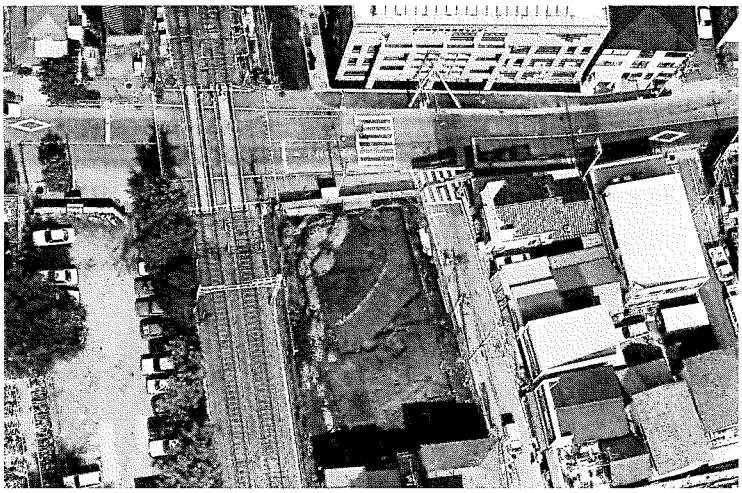


＝最近の発掘調査から＝

昔、昔の大昔、皆さんのお家の家系図をひもといたぐらいでは、とうてい足りないほど昔のお話です。そう、今から1450年ぐらい昔（1450年などと書くとすごく正確なように感じますが10年イヤ１年ひと昔の現在と違い、このぐらい昔となりますと±20年ぐらいの違いはよくあることで、なにせ読者の皆さんの中にも、この時代を研究している学者の中にも生まれていた人はいないことですし、書いた記録の無い時代のことですので……）。

その当時わが街府中には、分倍河原付近と白糸台付近に大きな村があったようで、それぞれ古墳（仁徳古墳や応神古墳などと異なり、規模が小さいことから村長のお墓と考えています）をたくさん造っていました。世にいう古墳時代後期＝群集墳の時代です。もう少し分かりやすくいうならば、壁画で有名な高松塚や、すばらしい馬具が出土した藤ノ木古墳、鎌足の墓と考えられる阿武山古墳、それに最近新聞に載った多摩川対岸の塚原（つかっぱら）古墳群が造られた時代です。ただ少し正確にいうならば、これら有名な古墳は古墳時代後期というよりも、古墳時代の後期でも終末を飾る古墳であるのに対し、府中で見つかっている古墳は群集墳の時代でも前半を飾る？有名な？古墳であるわけです。

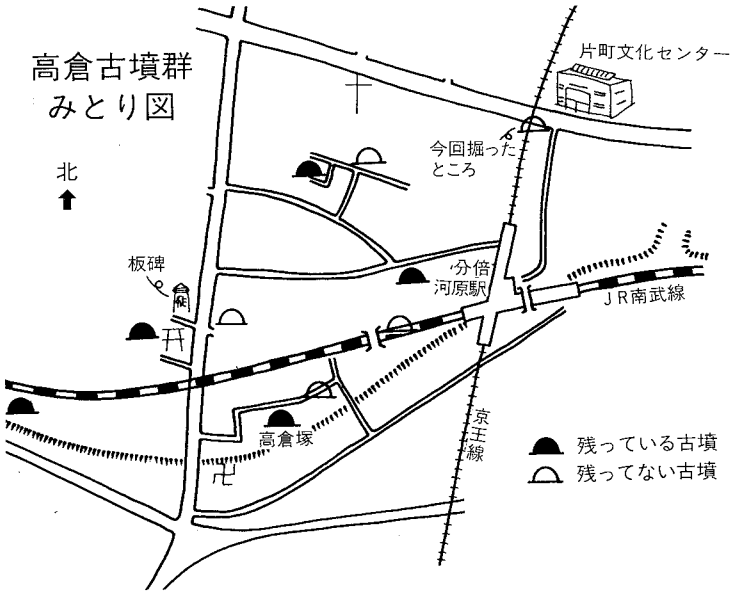
今回はこの二つの古墳群（かりに分倍河原付近のものを高倉古墳群、白糸台付近のものを白糸台古墳群と呼ぶと）のうち、高倉古墳群のうちの１基が調査されました。高倉古墳群は京王線・ＪＲ南武線分倍河原駅と鎌倉街道の中間、南武線の線路の南側に位置し府中崖線（台地と低地を分ける落差数メートルの崖）ぎわに、まるで低地に広がる水田＝耕作地を見下ろすかのように立地する高倉塚古墳を中心に、９基の古墳（古墳と思われる塚も含みますが）が分布することが知られていたのですが、今回の調査で10基目の古墳が見つかったわけです。場所は分倍河原駅北側、つまり駅を降りて商店街を抜け旧甲州街道に出る西側、10月５日にオープンしたばかりの片町文化センターの真正面（真南）で見つかったわけです。古墳の形は円墳と呼ばれるもので直径22メートルのマウンド（盛土で造った山）の周りに４メートル幅の周溝（水はたたえていませんでしたが、墓と俗世間を分けるための溝＝結界と考えてもらえば結構です）が回っていました。ただ今回見つかった古墳はマウンドはすでにならされ、マウンドの中に築かれていた主体部（遺体を入れる施設）も見つからず、周溝だけが見つかったわけです。古墳は全体の４分の１が見つかり、中心は京王線と旧甲州街道の交差する踏切南側ぐらいとなるようです。また片町文化センターの発掘調査の際は古墳の一部が見つからなかったことより（片町文化センターに達するほど古墳の規模が大きくない）、旧甲州街道の中を周溝が走っているようです。古墳の造られた時代ですが、先ほどの問題＝1450年ぐらい昔と考えられるのは、この古墳からは時代を知る手がかりである土器が出土しなかったのですが、近くで以前調査した古墳から須恵器という焼物でできた埴（はそう）と呼ばれる形をした土器が出土し、これが多摩川流域で見つかっている須恵器



の中では最も古い部類に属することが判明しており、この土器の研究から推論したわけです。

そこで問題なのですが現段階ではこの古墳を造った人々の村がまだ見つかっていません。台地の上にはなさそうですし、多摩川対岸となると遠すぎるように思います。低地のいずれかにあるかも知れません土器などを拾われた方はご連絡ください。

（片町・桑田ビル地区の調査から　荒井）



カメラアングル

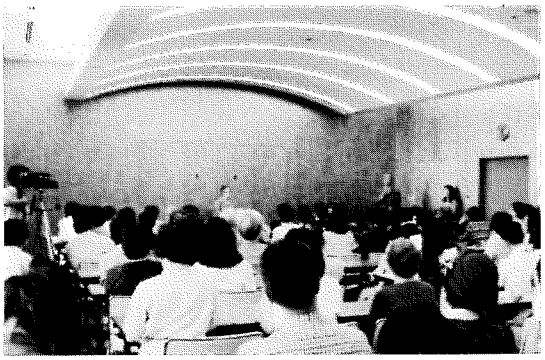
——事業日誌抄——

9/23〜10/18
特別展　富本憲吉—白磁と模様—

人間国宝　憲吉の中期の作品を中心に、未公開資料も含めて展示。白磁や色絵磁器の美しさをご覧いただきました。丸岡秀子氏をお招きした記念講演は超満員でした。

◀ 7/28・8/11　おもちゃを作ろう！

博物館のパソコンばかり遊んでいる君たち！今日は昔の手作りおもちゃに挑戦。



9/19・23 10/25　日食講座

太陽を直接見ては危険。安全でしかもいろんなアイデアの日食メガネを用意して、23日の日食に備えました。当日は晴天で大成功。その後は日食の専門家による講演会。

あれこれ ＝ゲンノショウコは赤い花？＝

先日、郷土の森園内の雑木林の中で珍しい花を見つけました。園内雑木林につくられている古代の井戸周辺の植栽地で、他の植物の緑にまじって小さな赤い花がつつましやかに咲いていたのです。近くに寄って観察してみると、それはゲンノショウコの花でした。ゲンノショウコは日当りのよい原野の草地や道ばたなどに生える多年草で、フウロソウ科の植物です。北は北海道から南は九州まで日本全国に分布しており、花期は7月から10月位までの間となっています。「現の証拠」といわれ、下痢止め、食中毒などに、飲んですぐに効果が現われる薬草としても有名な植物です。ところで、あれ？ゲンノショウコって白い花が咲くんじゃないの？と思われたかも知れませんが、この赤いゲンノショウコは、ベニバナゲンノショウコと呼ばれ、関東近辺では非常に珍しいものです。このあたりで見られるゲンノショウコはほとんどが白い花を咲かせ、ベニバナゲンノショウコが自生していることはめったにありません。わずかに苗圃などで栽培されているところでしかお目にかかれないのです。また、逆に関西方面では白い花が少なく、ベニバナゲンノショウコが多いといわれていますが、これは仲々興味深い知見だと思います。たぶん今回の赤い花は、園内造成工事の際に運ばれてきた土の中に入りこんできたものでしょう。折角咲いた赤い花のゲンノショウコ、頑張って来年も咲いてほしいものです。(N)

ベニバナゲンノショウコ

インフォメーション

●もちつき大会

12月20日(日)　園内復原農家の庭先で、昔ながらのカマドで蒸したモチ米をつきます。ふるってご参加下さい。

■第1回 郷土の森 梅まつり

来春2月、春の訪れを予告するかのように園内には紅白800本余りの梅が咲きほこります。郷土の森では、博物館及び園内をフルに活用した「梅まつり」を開催し、情緒豊かな観梅を提供します。博物館内では、梅に関わる郷土玩具として全国の天神様を紹介する他、日本と世界の梅切手や梅花の写真、さらに全国有名梅林のポスター、梅参考図書などを集めて展示します。また、園内では野点や琴、尺八、三弦の演奏などで観梅をより風情あるものに盛り立てます。郷土の花「梅」をじっくり眺めて下さい。春はもうすぐそばまでやって来ていますよ。

★プラネタリウムの新番組

冬の星座とブラックホール

オリオン座・ふたご座・おうし座など代表的な冬の星座の紹介とブラックホールの話題をおとどけします。謎の天体ブラックホール、科学的データをもとにその謎に迫ります。はたしてブラックホールとは何なのでしょう？　あなたも想像の宇宙に出て、ブラックホールを体感してみませんか。

12月17日(火)～21日(土)の間は番組入替えのため、プラネタリウムはお休みします。

あるむぜお　第2号
発行年月日　昭和62年12月15日
発　行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423－68－7921